

Title	『ある女』におけるキリスト教の影響
Author(s)	小室, 廉太
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume29, 2015.3 : 173-188
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5511
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

『ある女』におけるキリスト教の影響

小室 廉 太

序

アニー・エルノー (Annie ERNAUX, 1940-) は自伝的小説から出発し、今日では無名の人々に視点を当て、その姿を描く作風を確立した作家である。二〇一一年には、『人生を記す』^①という表題の下、ガリマール社の軽装版全集 *Quarto* にその作品の大半が収められた。これは存命の作家では稀なことであり、フランス国内での評価の高さが窺い知れる。二〇一四年度のノーベル賞作家であるモディアーノ (Patrick MODIANO, 1945-) でさえ、*Quarto* 全集が発刊されたのは二〇一三年であることから、エルノーが現代フランス文学を代表する作家の一人であることは理解できるだろう。

本稿では『ある女』 (*Une Femme*) をとりあげ、まず物語を素描しつつ、その構成に着目する。そして、作中におけるキリスト教の影響と、それが作品に果たした役割を考察する。最後にこの作品の社会的な意義を考えてみたい。

第一章 『ある女』の構成——ノンフィクションである文学作品

『ある女』に先立つ一九八四年、エルノーは父の死を契機とし、その生涯を描いた『場所』(La Place)を発表している。その年のルノード賞を受賞することになる本作において、作者はそれまでの作品に示されていた「小説」というパラテクストをはずし、さらには登場人物に架空の名前を与えることもしていない。^②この作品以降、作者と語り手の「私」との相違は見られなくなり、内容的なフィクションはなくなっている。

同様に『ある女』も語られる内容におけるフィクションを排した作品である。^③構成においても、『場所』同様、単なる編年体の文章にはなっていない。作者は意図的に物語に「書きつつある作者」を挿入している。本章ではその構成を見てみよう。

語り手である「私」は、養老院に入所していた作者自身の母の死を契機として、一介の庶民として「歴史がなかった」母についての、物語を記すことを決断する。

母が死んだ。四月七日の月曜日、ポントワーズの病院付属の養老院であった。そこに二年前に私が彼女を預けたのだ。看護師が電話で言った、「お母様が今朝お亡くなりになりました。朝食の後でした」時刻はほぼ一〇時^④だった。

この冒頭部分は、アルベール・カミュの『異邦人』(L'Étranger)の冒頭、「今日、ママンが亡くなった。」とい

う書き出しを想起させる。⁽⁵⁾ 多少なりとも文学に興味のある者なら誰でも知っているこの書き出しを、現代文学の教授資格を持つエルノーがあえて選択しているのである。そこには『異邦人』を本歌取りすることで、本作を単なる物語以上のもの、「文学」へと至らせようという、作者の意図があるのではないだろうか。

母の死が述べられた後で、作者が生まれる前のその姿が、母自身の話や写真などから描かれる。そして、作者が生まれた後の母との思い出、さらに老いてゆく、とりわけ痴呆症になってゆく過程が綴られ、最後に再び母の死によって、この「伝記でも、勿論小説でもない」、「文学と社会学と歴史の間に位置する何か」は終わる。⁽⁶⁾

母の姿を語る文中に、語り手Ⅱ作者がこの作品を書いている状況やその時々感情が挿入されるのだが、それは、ある場合では母の物語を区切るかのように、また他方ではこの物語の解釈方法を読者に示している。物語の流れに従って順にみてみよう。丸数字で記された部分は母の過去についての記述、「Ⅰ」で示された部分が現在形で記された、記述時の感想をまとめたものである。

① 母の死と葬儀

・生前の姿を記す決意（一九八六年四月七日〜四月二〇日）

② 母の出生前後から語り手の「私」を妊娠するまで（一九〇三年〜一九四〇年五月）

・書く行為Ⅱ「母をこの世に生み出すこと」（一九八六年六月初旬）

③ 第二次世界大戦を挟んだ、母の四〇〜五〇歳代にかけての姿（一九四〇年〜一九五〇年代）

・母の言動を個人的特徴としてではなく、それを彼女の人生の軌跡と社会的境遇とに関連づけ、より一般的なイメージへと結びつけようという意図（日付不明）

④ 一九五〇年代の「店の主」、「子供の親」としての母の姿。思春期の「私」との対立

・「私」が一六歳頃に頂点に達した、母との対立を書こうという意思（日付不明）

⑤ 一九五〇年代後半、思春期における母への幻滅。母の倫理観、社会観への反発。「私」の大学進学による、知的、階級的隔たりの発生

・母の思い出について書くこと⇨母との時間を追体験し、共に生きているという感覚。この本を書き終えることは、「母の死」を認めることになる予感（日付不明）

⑥ 「私」の結婚を機に生じた、空間的、階級的な隔たり。娘がブルジョワ階級に嫁いだことによる母の誇りと劣等感。一九六七年の、父の死を契機とした店の閉店、母との同居（一九七〇年）。七〇年代半ばの母の一人暮らし。一九七九年、母の交通事故による足の骨折と一週間にわたる意識不明。呆けの発症。一九八三年、母と「私」の同居

・母におけるアルツハイマーの進行、「彼女は正気ではなくなった」。文章によって、痴呆症になってしまった母と、かつての明敏な母をつなぐという意思

⑦ 母の痴呆の進行。老人病棟への入院、そして養老院への転院。骨折と肉体的な衰弱、車いすでの生活、そして突然の死。（一九八四年～一九八六年四月）

・執筆していた一〇か月の思い出。「私」は毎晩母の夢を見ていた。「今ではすべてが結びついた」⇨母の死の認識、喪の作業の完了

このように、七度にわたって「書きつつある私」⇨作者が作品中に登場するのである。語りの構成は、内容にお

けるフィクションを排除しつつも、単なる記録ではない、いかに物語るかを目指す行為となる。自己言及的な挿入文の一つは、その意味を以下のように述べている。

実際、物語る順序や、どんな単語を選び、どう配置するかを考え、多くの時間を費やしている。あたかも理想的な順番があつて、そのみが母に関する真実を表すことができるかのように。しかし、私にはその真実が何に依拠するのかわからないし、書いている最中は、その順序を発見すること以上に重要なことはないのだ。^⑦

このように、『ある女』は架空の事柄（フィクション）からは遠ざかりつつも、単なるドキュメンタリーでもなければ、エッセイでもない、語り方に配慮した文学作品であるといえる。『場所』以降のエルノーの作品を通して見出されるのは、この構成への意識であり、セルジュ・ドゥブロフスキー (Serge DOUBROVSKY, 1928-) の述べる自伝フィクション (Autofiction) に相当するものである。^⑧

第二章 キリスト教の影響

この章では語り手の母の生涯におけるキリスト教の影響を考察する。

「ある女」である「母」は、二〇世紀初頭の大地主たちの支配下にあつたフランスの小都市、イヴトーに、農場の馬方だった父と、機織り内職をしていた母との間に生まれた。^⑨ 言うなれば彼女は被支配階級の生まれたことになる。語り手に従えば、「彼女は読み書きができ、初等教育修了証を郡でトップの成績で取得したのだから、事情が

許せば小学校教員になることもできた」はずだった。¹⁰しかし、両親は彼女を村から出すことを許可しなかった。教員になって「村から出る」ことは家族と別れること、言い換えれば、被支配階級から抜け出ることを意味していた。当時、被支配的階級から支配階級へと移行しようとする手段は教育へと結びついていった。「ある女」はその手段を拒否され、公立小学校に通い、季節ごとの家事の手伝いによって出席さえ覚束ない状態で、一二歳半には学校に通うことさえ許されなくなる。それに反し、キリスト教に対しての信仰は推奨されていた。

(……) ミサに欠席することは許されなかった。ミサに行けば、たとえ教会の末席にいても、豊かさと美と精神性(刺繍の施された司祭服、金の聖杯、賛歌)に触れ、「犬のような生活」はしていないという気になれるのだった。母は早くから宗教への性向を示していた。¹¹

勉学を止めた彼女は、マーガリン工場に就職し、その後一九二〇年代の工業化によって大きな製鋼工場ができると、他の兄弟たちとともにそこへ転職する。こうして彼女は地方の農奴から都市の女工へと労働形態を変えてゆく。しかし、社会的地位は相変わらず低く、そのことを彼女は自覚する。¹²貧しい家庭で、充分な教育を受けられずに育った者たちは、みな同様の状況だった。そして、その将来も殆ど決まっており、多くの者がアルコールに溺れ、早世していた。彼女の兄弟も過酷な労働環境の中で、一番下の妹を除いて、六人中四人が煙草やアルコール中毒で若くして亡くなる。¹³彼女を救ったのは、その自尊心と信仰心だった。

「女工だけど真面目だ」という評価を受けられるように、できるだけミサに参加し、告解をし、聖体を拝受

し、孤児院の修道女たちのところで自分の嫁入り衣装に刺繍を施し、決して若い男と森に行くようなことはなかった。^④

信仰を守り、堅実な生活を志す彼女は、同じ製鋼工場で働く、七歳年上の男性と一九二八年に結婚する。当時、結婚は一人の女性にとっては、人生を決定づけるものだった。彼女が選んだのは、馬方の父と機械工の母を持ち、一歳で学校に通うことを止めさせられた、自分と同様の被支配階級出身の者だった。彼もまた農家の下男として働き、この工場へとやってきていた。酒を飲まない、性格は穏やかで陽気、家庭を持つために給料を蓄えていた真面目な男性だった。彼女の選択には、信仰に裏打ちされた堅実な生活への渴望がみてとれる。彼女たちは一九三一年、イヴトーから二五キロ離れた労働者階級の町、リルボンヌのラ・ヴァレ地区に酒屋兼食料品店を月賦で買い、工場で働く、以前の自分たち同様の貧しい労働者たちを相手にした。彼女はそこで商売上の手腕を身につけ、人に出会うことが増えるにしたがつて言葉遣いや身だしなみに注意を払うようになる。その頃、第一子の娘も生まれるが、一九三八年、ジフテリアで亡くなっている。

一九三八年、彼女（註…最初の娘）はジフテリアで亡くなった。復活祭の三日前だった。彼らは、子供を幸せにしてやれるように一人だけと考えていた。

悲しみを内に宿し、外に現れるのは憂鬱な沈黙と、「天国にいる聖女さま」への祈りと信仰だけだった。新たな生命の到来。一九四〇年初頭、彼女は別の子供を身ごもった。私が九月に生まれるのだった。^⑤

ここに記される、最初の子供の死去と、新たな子供の誕生の間には、神への祈りが含まれている。子供を失った悲しみと、そして新たな子供に恵まれたことは、信仰に結びついているのだ。そして、もう一つ重要なことは、最初の子供がそのまま育つていれば、必然的に作者である「私」は生まれてなかったことである。それは、「ある女」の物語も世に出ないことを意味する。語り手は述べている、

今、私は母について書くことによって、今度は私が母をこの世に生み出そうとしているように感じている。¹⁶

ある人物の生涯について記す、という行為は、その存在を「歴史」物語 (histoire) の中に刻み、記録することである。作者が生まれたこと、そして『ある女』が書物になったことは、熱心な信仰の結果ということになる。

信仰は、母の倫理観やその行動にも表れる。第二次世界大戦中の、ドイツ占領下のラ・ヴァレ地区では、彼女の営む店の前には、食料を求める人々が集っていた。彼女は全ての人に、とりわけ子供の多い家庭には、食料不足にならぬように心がけた。「親切でありたい、人の役に立ちたいという望みと誇り」が、彼女が空襲にさらされようと、店の営業を続ける原動力になっていたのである。¹⁷

第一章で見たように、本作では「母の物語」に「書きつつある私の状況」が挿入されているが、大戦中の「母」について、初めて「私」の記憶も加わってくる。¹⁸ここから、物語の展開が「私」と「母」との関係、「私」から見た「彼女」の姿へと移行してゆく。

まず、「母」は「私」にとつてのあこがれの対象となる。¹⁹第二次世界大戦後、一家は娘の体調がすぐれないことを理由に、かつて住んでいたイヴトーに転居し、三か月後には食料品店を兼ねるカフェを開店する。母のキリスト

教に対する信仰は相変わらず熱心なものであり、「私」の思い出もキリスト教への信仰に結びついたものだった。

教会で、彼女は大きな声で聖母マリアへの賛歌を歌っていた、「いつか天国で彼女に会おうでしょう」^⑳
聖体拝受のお祝いの席で、彼女は酔って、私の隣で吐いてしまった。^㉑

「母」は語り手を、公立小学校ではなく、私立のミッションスクール入れる。この行為は、「母」の信仰に依拠しているだけではなく、自らがかつて十分な教育を受けられなかったことにも起因する。母における信仰は教養へと結びついているのだ。それは娘の幸せのため、そして自らの置かれている境遇を脱してほしいという願いも込められている。

私が例えば、丈夫な筆記用石版を友達が持っているといえ、母はすぐに同じものが欲しくないと尋ねるのだった、「お前が他の子たちよりも恵まれていないとは言われたくないのだよ」彼女のもっとも強い願いは、自分が持てなかったものすべてを私に与えることであつた。^㉒

そして、娘に教育を施すことによつて、「母」は自らも教養を身につけようとする。先に記したように、信仰が教育と結びついたものと捉えるならば、教養を得ることは信仰に即したものとなる。

彼女は何でも学びたがつた。社交上の作法（不作法でないかという恐れ、作法に関する絶えざる不安）、流

行りの事柄、新製品、大作家の名前、新作映画（しかし時間がなくて映画館には行けなかった）、庭に咲く花の名前など（……）向上することは、彼女にとっては、まず学ぶことだった。²³

彼女は学びたいという欲求を私を通じて追い求めた。夜、食事の時に、学校のことや、教わったこと、先生たちのことを私に話させた。²⁴

一方、「私」は教育によって、自分の育ってきた境遇がミッシヨンスクールに通う他のブルジョワ階級の同級生とは異なることを感じ、思春期を迎える頃には「母」に対しての嫌悪感を抱くようになる。²⁵ 大学に進む頃になると、こうした嫌悪感は徐々に解消されるが、「私」と「母」との階級的な隔たりはさらに意識化され、「母」は「私」に「階級の敵」を、「私」は母に「恥」を感じるようになる。²⁶ 本章冒頭で述べたように、教育は被支配階級から支配階級へと移行する手段である。「母」は「私」の幸福のため、自分が叶えられなかった夢を託すために教育を授け、その結果、「私」を見事にブルジョワ階級へと至らせた。そのことに「母」は誇りを持ちつつも、しかし、同時に、自分自身の劣等感を生み出してしまったのである。

「私」が大学生時代から付き合っていた男性と結婚すると、「母」との関係は空間的にも疎遠になる。だが、一九六七年に「私」の父が亡くなると、営んでいた店をたたみ、娘夫婦の元で暮らすようになる。当初は劣等意識から居心地の悪さを感じていたが、徐々に生活に慣れ、孫たちの世話に生きがいを見出す。彼女が赴く場所は教会である。

午後になると、小さい方の子供を乳母車に乗せ、彼女は町を散策するのだった。様々な教会へ行き、遊園地

で何時間もすごし、旧市街をぶらついて、夜になるまで帰ってこなかった。⁽²⁷⁾

一九七〇年代半ばにパリ近郊の新興住宅地に一家が引っ越すと、「母」はそこでの生活になじめなくなり、知り合いのいたイヴトーへ再び戻ることになる。新興住宅地では、心のよりどころである教会に行くことも困難であったのだ、

ほんのささやかな用事、たとえば靴下一足を買うことや、ミサや美容室に行くことに、私と私の車を必要とすることが、彼女の心の重荷になった。⁽²⁸⁾

一九七九年末、「母」は交通事故に遭い、一週間意識不明になる。その後、体調は回復し、一人暮らしを再開するが、徐々に呆けが見られるようになってゆく。その後、一九八三年には脱水症状から病院へと運ばれる。「私」は「母」を引き取るが、痴呆症は一層激しいものとなり、一九八四年、アルツハイマー症と診断され、老人病棟へと入院する。

宗教心は彼女から消え、ミサに行く気も、ロザリオを身につけたいという気も全く起こらなかった。⁽²⁹⁾

人生の基準となっていた信仰心を失ってしまった「母」は、正気も失うことになる。病棟と養老院とを転院しながら、彼女は生きる氣力をなくし、⁽³⁰⁾身の回りの物をなくし、⁽³¹⁾周囲の人々の記憶をなくしてゆく。⁽³²⁾こうして、彼女は

徐々に人間性をなくし、一九八五年夏には骨折をしても手術さえしてもらえず、⁽³³⁾車いすでの生活になり、翌年の四月に亡くなることになる。

以上のように、「母」の人生はキリスト教への信仰によつて支えられ、発展し、また、その喪失によつて徐々に終わりを迎えたことになる。そして彼女の生涯を記した本作が我々読者に残されたのも、キリスト教に基づいた教育への意思によつてである。

第三章 「ある女」たちの記録

最後にタイトルについて考えてみよう。なぜ作者は「私の母」といった題名でなく、不定冠詞のついた、「ある女」という題名にしたのか。また、作者の母について語られているにもかかわらず、その氏名も、明確な生年月日も記されていないのか？

まず、この記録は伝記ではない。なぜなら伝記とは主人公が歴史的あるいは社会的に一定の認知を受けた人物についての記録だからだ。⁽³⁴⁾「ある女」は、実在した人物であつても、読者には全く未知の人物でしかない。作品冒頭で「私からすれば、母には歴史（＝物語）がなかった」⁽³⁵⁾と述べられているのは、彼女には自己のことを書き残す術もなければ、誰かにその生涯を描いてもらえるような著名人でもなく、歴史上忘れ去られる運命の、しがたい被支配階級出身の「ある女」だからである。

そして、このような生涯を送った者は、エルノーの母以外にも数多くいたであろう。現代社会においては、ブログやツイッターといったソーシャルメディアによつて、個人の情報発信を積極的に行えるし、インターネット上に

は過剰なまでに個人情報横溢している。しかし、「母」の生きた時代には、彼らの姿は殆ど知られることがなかったのである。作者があえて「母」の名やその生年月日を明示しないのは、この個人に関する記録が、同世代の、数多くの、無名の人々の生涯をも象徴しているからではないだろうか。つまり、二〇世紀初頭に地方の農村に生まれ、工業化の波の中で工場労働者となり、二度の戦争を生き抜き、家族をもうけ、そしてやがては痴呆症を患い、養老院で亡くなってゆく、声なき多くの人々を。この意味で、「母」の姿は特殊な一例であるのではなく、同時代の多くの庶民の姿であり、それを描き出すことは社会学的意味合いを持つものになる。

「この本は伝記ではないし、もちろん小説でもない。おそらく文学と社会学、歴史の間に位置する何かだ。被支配階層に生まれ、そこから脱出しようとした母自身が、歴史となる必要があった」という言葉を解釈するなら、『ある女』は、大文字の「歴史」(Histoire)には記されない、無名の者たちの小さな「物語」(histoire)であるといえる。

結び

本作『ある女』はキリスト教をメインテーマにした作品ではない。しかし、この作品の対象は、信仰に支えられ厳しい時代を生き抜き、信仰によって教養を得ようと欲し、娘の教育に腐心した「ある女」の存在である。そして、その生きる力はアルツハイマーの進行とともに信仰心を失うことで弱まっていったのである。また、「ある女」の姿がこうして本になった（『Histoire 歴史』物語になりえた）のは、信仰による教育の結果である。この点において、本作品は二〇世紀中葉における、フランスの、一般庶民における、キリスト教の影響を如実に示す作品である

といえるであろう。

注

- (1) Annie ERNAUX, *Écrire la vie*, Quarto-Gallimard, 2011.
- (2) 「……」私は父を主人公とした小説を書きはじめた。しかし物語の途中で嫌気がさしてしまった。最近になって小説にするのは無理だとわかった。糊口を凌ぐことに明け暮れざるを得なかった人生を語るのに、初めから芸術の立場に立ち、「興味津々な」あるいは「感動的な」何かを作りあげようとする権利はない」*La Place*, Folio-Gallimard, 1983, p.23.
- (3) エルノーはピエール・フルー・フォールとの対話の中で、以下のように述べている。「登場人物の「私」が、まさしく私であるアニー・エルノーで、私が書き、私が一九八六年四月七日に母を亡くし、作中には架空の要素が何もない点から、『ある女』は勿論自伝のジャンルに属します」。Pierre-Louis FORT, *Entretien avec Annie Ernaux dans Une femme*, texte et dossier-Gallimard, 2002.
- (4) Annie ERNAUX, *Une femme*, Folio-Gallimard, 1987, p. 11.
- (5) Albert CAMUS, *L'Étranger*, Gallimard, 1942.
- (6) *Une femme*, p.106.
- (7) *Ibid.*, pp.43-44.
- (8) 自伝フィクションについては、小室廉太「命名への意思——自伝、フィクション、自伝フィクション」『AZUR』第5号、成城大学フランス語フランス文化研究会、二〇〇四年参照。
- (9) 一九三一年「私」の両親がリルボンヌに酒屋兼食料品店を買った時、母は二五歳であることから、一九〇六年生まれであることがわかる。
- (10) *Une femme*, p.25.

- (11) *Ibid.*, p.29.
- (12) 「彼ら（註：母の家族）の中で最も気性が激しく、自尊心も一番強かったのが私の母で、また同時に社会の中での自分の地位の低さをしっかりと認識し、そのことによって判断されることを拒否もしていた」 *Ibid.*, p.32.
- (13) *Ibid.*, p.34.
- (14) *Ibid.*, p.33.
- (15) *Ibid.*, pp. 42-43.
- (16) *Ibid.*, p.43.
- (17) *Ibid.*, p.44.
- (18) 「彼女の体つきについては、私は何も見逃さなかった。大きくなるにしたがって、私も彼女のようになるのだと思っ
ていた」 *Ibid.*, p.46.
- (19) 「私達（註：父と私）は母に恋をしているかのようにだった」 *Ibid.*, p.46.
- (20) *Ibid.*, p.49.
- (21) *Ibid.*, p.50.
- (22) *Ibid.*, p.51.
- (23) *Ibid.*, p.56.
- (24) *Ibid.*, p.57.
- (25) 「私のモデルはもう母ではなくなった。私は服飾誌『レコー・ド・ラ・モード』のなかで出会う女性のイメージをい
いと思うようになったが、そのイメージに近いのは寄宿学校のクラスメートの母親たち、プチ・ブルジョワの母親た
ちのイメージだった。（……）私は自分がどれほど母に似ているか知っていただけに一層彼女の乱暴な話し方や振舞
いが恥ずかしかった。私が母に不満を抱いたのは、自分の居場所をこれまでと異なる社会環境に移しつつあった私が、
自分から払拭しようとしてきたまさにそのイメージを彼女が体現していたからだだった。その上、私は教養を身につけ
たいと思っていることと、教養があるということとは全く異なることだと痛感した。母は辞書を引かなければヴァン・
ゴッホが誰なのか言えなかったし、大作家たちのことも名前しか知らなかった」 *Ibid.*, p.63.

- (26) *Ibid.*, p.65. 「恥」の意識については、小室廉太「恥をかく——エルノーのエクリチュールから」『AZUR』第6号、成城大学フランス語フランス文化研究会、二〇〇五年参照。
- (27) *Ibid.*, p.79.
- (28) *Ibid.*, p.81.
- (29) *Ibid.*, p.95.
- (30) 「数週間で、彼女からしつかりしていようという気が失せた」*Ibid.*, p.97.
- (31) 「彼女は少しずつ身の回りの物をなくしていった、お気に入りだったカーデガンや、予備の眼鏡や洗面道具入れなど」*Ibid.*, p.98.
- (32) 「ますます周りの人々のことが分からなくなった。聞こえた言葉は意味を失っていたが、彼女は適当に答えた」*Ibid.*, p.98.
- (33) *Ibid.*, p.100.
- (34) フィリップ・ルジュンヌによれば、自伝作家とは読者にとつて既知の存在、有名人であり、その自伝と履歴に客観的な同一性を見出すことが可能でなければならない。cf. Philippe LEJEUNE, *Le pacte autobiographique*, Seuil, 1975, pp.23-26. 伝記も同様に歴史上の存在についての作品である。
- (35) *Ibid.*, p.22.
- (36) *Ibid.*, p.106.